

随筆の随筆

森田大正著

講談社版



KODANSHA

絹の隨筆

著者 森田 たま

昭和三十六年二月十六日 印刷

昭和三十六年二月十九日 發行

發行者 東京都文京區音羽町三ノ十九野間省一

印刷所 東京都文京區大塚坂下町一四豐國印刷株式會社

製本所 東京都豐島區西巢鴨一ノ三〇五三黒柳製本所

發行所 東京都文京區音羽町三ノ十九講談社

電話東京(941)代表三二〇一(九)番 振替東京三九三〇

定價三百四十圓

亂丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Tama Morita 1961

目 次

絹のころ	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	二
結ぶ	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	一五
あけぼの	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	一九
たんぽぽすみれ	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	三三
百花の春	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	元
夏の中の秋	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	三
秋草	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	三六
紅葉日和	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	四
きもの寸見	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	四四
父の遺産	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	五
色あせた古着	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	五
藤むらさきの袍	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	五九

春	猫	年	着物時代	久留米がすり	五月のもめん	花あやめ	玉蟲	初夏の装ひ	はじめの着物	春風の町	春宵
雨	柳	輪									
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
一〇九	一〇五	一〇三	九九	九五	九〇	八五	八〇	七三	六七	六五	六三

春の涙……………二二

美しい友情……………二五

一生の我慢……………二八

アカシヤの町……………三三

素質の魅力……………三四

ロケット博士……………三八

春風の政治家……………四一

その人……………四〇

いせ女……………四三

秋祭り……………四六

トマトカチップ……………四〇

旅の味ヨーガ……………四四

おみやげ	………	一四
お料理教室	………	一五
冬の庭	………	一六
金と人生	………	一七
大晦日	………	一八
めでたいこと	………	一九
雪國へ行く	………	二〇
先生	………	二一
言葉	………	二二
讀書	………	二三
女の場所	………	二四
薔薇と香水	………	二五

花	………	一九一
勤評スト	………	一九四
そそつかしい話	………	一九七
霜夜のおもひ	………	二〇三
フラグなど	………	二〇五
天使の色	………	二一
陪聴の記	………	二二
女の勝負	………	二九
さへづり	………	三三
春日遅々	………	三六
旅の心	………	三〇
レコードざらひ	………	三三

狸の片口……………三八

ビヤ樽の栓……………三四

かやき鍋……………四九

梨子の來た午後……………三五

薔薇の中の青春……………三五

二つの額……………六三

うたふ繪はがき……………六六

銀座の秋……………七三

著者
自裝

絹
の
隨
筆

絹のころ

日本の絹の美しさを、日本の女の心としたい。……新春の床がけに何か一トふでとたのまれてあれやこれや思ひまどつてゐるうちに、ふつとこんな文句が浮んだ。頼うだお方は着物道樂の美しい夫人だから、ちやうどいいかもしれないと、これを書くことにした。

むかしから女の肌の美しさを羽二重にたとへることがよくあつた。きめがこまかく、すべすべとして、ひやりと冷めたい感觸の中に、やがてほのぼのと絹のあたたか味がかよつてくる。さういふ女にめぐりあつた男は仕合せ者とされてゐるが、現代の世之介のやうなある浮氣な男が、十年前に若くして逝つた新妻をしのんで云つた。「あれはまるで羽二重のやうな女でしたよ」

ほんたうに、白い魚のやうなあぶらののつたまるい手をしてゐて、顔もまるくあどけなかつた。すべつこい肌にはんのりと血のいろが透けて見えて、雛の日のぼんぼりに灯がはいつたやうであつたが、彼が云ふのはその外見の美しさではなくて、心のきめのこまかさである。

おべん當をつくつてもらつて、會社へ行つて、ひらいてみたら御飯ばかりでおかずがはいつて

るなかつた。おむすびでも梅干ははいつてゐる。御飯ばかりのおべん當は、彼にとつて生れてはじめての経験であつた。腹がたつより、何となくをかしかつた。

家へかへつてみると、若い妻はまぶたを紅く泣きはらして出てきた。「ごめんなさい。おかず入れるの忘れちやつたの」深窓に育つたお嬢さんで、いままで一度も炊事をしたことがなく、おべん當といふものもつくつたことがなかつた。主人が出動したあとで、戸棚の中におかずを発見した。それで彼女はおひるの御飯を、たつた一人で、おかずなしで食べたのである。

「御飯だけたべるのつて、とても辛いものね。お湯をかけて流しこんだけど、それでもものどにかへるやうな氣がして、一ぜんがやつとだつたわ」

自分の落度を素直にみとめて、自分の罰を自分に科したこの新妻の、やさしくもきびしい心情には、どんな夫でも打たれるであらう。彼女はその後もしばしば間の抜けたことをしたけれども、夫の愛情は深まつてゆくばかりであつた。

このおつとりとした妻に死に別れ、いろいろな女遍歴をしたあとで、第二の妻を迎へた。やはり名門の出で、料理裁縫の家事から社交まで、あらゆる點で至れりつくせりの賢妻である。天地がさかさまになつても、夫に御飯だけのおべん當を持たせるやうなことはしない。缺點はただ一つ、出入りの男たちを呼び捨てにすることだが、それも呼ばれる方が、昔のお姫さまからぢきぢきお言葉を頂くだけで、もう十分に満足してゐるのであつてみれば、べつに咎めるにも及ばぬであらう。しかし彼女の夫は云ふのであつた。

「前のにくらべると、今度のはズックの袋ですよ」

タフな精神、……それは戦後の險しい世の中に、なくてはならぬものであつたのだが、男は女
のその強さに敗けて、ズックの袋だなどといふのである。氣性の勝つた、どんな落度もない女と
いふものは、他人からは賞められても、夫の愛情はうすれてゆくらしい。

正月某日、家元の初釜に招かれて行くと、男よりもやはり女の方が多く、老いも若きもそれぞ
れに晴れ着の妍をきそつてひかへてゐる。

七十をだいぶまはつてゐるらしい老夫人が、グリンのかかつた鐵無地の紋付を着て、端坐して
をられた。つめたいけれどもいい色あひだと思つて眼をとめると、袖口にちらりと洗ひ朱の長じゆ
ばんが見えた。白ぬきの菊壽のもやうである。春火桶じゆばんの袖の美しくといふ句を、以前つ
くつたことがあつたが、まるでこの老夫人のためにつくつておいたやうな氣がした。

知らないお方だけれど、何か親しい感じがして、なほよく見ると、無地とおもつた膝がしら
に、墨で老松を染め出してあるのがわかつた。どうも何とも心憎い好みであつて、かういふ夫人
は功成り名とげて、主婦の座は既につきの世代にゆづり、自分はお茶三昧に明け暮れしてをられ
るのであらうと、ちよつと羨ましい心地がする。

自分などは、七十をすぎればおしやれをする氣も失せ、お正月に新しい着物をつくる意欲もな
く、したがつてどこへも出なくなるだらうと思つてゐたが、かうして、いくつ年をかさねても、
年は年なりに心くばりをした衣裳を身につけてゐるお方にあふと、人間はいくつになつても、怠

けてはいけないのだと、自からを鞭うつやうな氣持になつた。

晴れ着に心をくだくのは、若いうちのこととばかり思つてゐたけれど、女はいのちあるかぎり、女であることを忘れてはいけないので、袖口にちらりとのぞいた洗ひ朱のじゆばんが、老いの美しさを語つてゐる。年をとつたからといって、赤い色の一切を排斥するのは、潔癖のやうであつて、かへつて若さへのみれんがあるやうな、老醜を感じさせる。

七十にならうと、八十にならうと、女を忘れない人の心には、羽二重のやうなすべすべした、きめのこまかな思ひがひそんでゐるのであつて、おべん當に御飯ばかりをつめた新妻の、あのおつとりとした、素直な氣持が、一生なだらかにつづいてゐるやうな氣がされる。それは人中へしやしやり出て、牛耳をとる社交婦人ではなく、といつて家庭の中で、子供の勉學を勵ます賢母でもなく、内助の功ある良妻でもなく、ただいつも涙もろく、人のあはれな話を身にしてみてきく、ふつうのやさしい女である。私はその心を、絹の心と思ふのである。